

幼児期の発達と文化

大 桃 伸 一

Development and Culture in Early Childhood —from Investigation in Niigata City—

Shin'ichi Ohmomo

I はじめに

前稿、「幼児期の発達と遊び」(県立新潟女子短期大学研究紀要第31集所収)では、5・6歳児に対する生活実態調査のうち、主として遊びの問題を取り上げ検討した。その結果、「近くに安心して遊べる場所のない子は、ある子に比べて、貧しい遊びの世界しかもてず、基本的生活習慣の自立がおくれ、日常的な道具などの使用能力が劣り、総じて発達がおくられている」など、注目すべきことが明らかになった。そして、幼児の成長や発達における遊びのもつ意味の大きさを、あらためて知ることができた。

本稿では、新潟市の5・6歳児に対する生活実態調査のうち、習い事、テレビ、絵本など主に文化や生活経験に関する項目を取り上げ、その実態を明らかにする。また、それらを他の項目と関連づけて検討するなかで、幼児期における発達と文化などとの問題について考えてみたい。

II 調査の概要

1. 調査対象

新潟市に在住の5・6歳児をもつ両親618組。

2. 標本抽出

$$n = \frac{N}{\left(\frac{\varepsilon}{\alpha}\right)^2 \frac{N-1}{0.5(1-0.5)} + 1} = 563.82$$

$N=5.751$ (対象者)

$\varepsilon=0.04$ (誤差4%)

$\alpha=2$ (信頼度95%)

3. 調査方法

新潟市に所在する幼稚園および保育園から618組の両親を抽出(幼稚園310組、保育園308組)、幼稚園・保育園を通して、1987年9月28日から10月5日までの間に配票、回収。配票618、回収557(回収率90.1%)、有効票本数523。

III 結果と考察

1. 習い事

(1) 子どもが「習い事をしていますか」という質問に対する答えは、図表1-1のとおりである。全体的にみると「していない」子の方が少し多いが、「している」子も44.4%もあり、5・6歳児でもかなりの子が習い事をしていることがわかる。また、男の子は習い事をしているのが38.2%であるのに対し、女の子は51.2%と、男の子よりも女の子の方が習い事をしている割合が高い。

「している」と答えたものに対して、「習っているものは何ですか」とたずねた結果の10位までを示したのが、図表1-2である。また、男女別にベスト5を示せば、図表1-3、図表1-4となる。女の子はピアノが非常に多いが、男の子は水泳が第1位である。あげられた習い事を分類して男女別に示すと、図表1-5のようになる。男の子は「スポーツ関係」が1番多く、「音楽関係」について、英語や公文などの「知育関係」もかなりみられる。これに対して、女の子は、音楽関係が6割をこえている。また、男の子に比べて、英語や公文などの割合が少ないのに対し、バレエやジャズダンスなど「その他」の割合が多い。

(2) 習い事をしているかどうかを、他の調査項目と

クロスさせて関連をみると、次のようになる。

㊦ 核家族、三世代家族など家族形態の違いによる、習い事をしているかどうかの差はほとんどみられない。

㊧ 父親の就業形態別にみると、習い事をしている子の割合は、勤め人43%、自営53%である。これを、母親についてみると、無職60%、自営41%、勤め人31%、パート24%となる。子どもが習い事をするかどうかは、父親よりも母親の就業形態に影響される割合が高く、母親が無職の場合、習い事をしている子の割合が高い。

㊨ 就園別にみると、幼稚園と保育園とでは、はっきりとした違いがみられる(図表1-6)。すなわち、幼稚園に行っている子は66%と、実に3人に2人が習い事をしているのに対し、保育園では21%と、習い事をしている子の割合は幼稚園の1/3以下である。これは、園からの帰りの時間が違うことも原因と思われるが、幼稚園と保育園とでは、親の習い事に対する考え方がどのように異なるか、あらためて検討されなければならないであろう。

㊩ 生活習慣の自立との関連を、「着替え」についてみると、図表1-7のようになる。習い事をしている子は、「自分からする」の割合が少し高いが、「なかなかしない」の割合も少し高く、両者の関連をみいだすことは難しい。

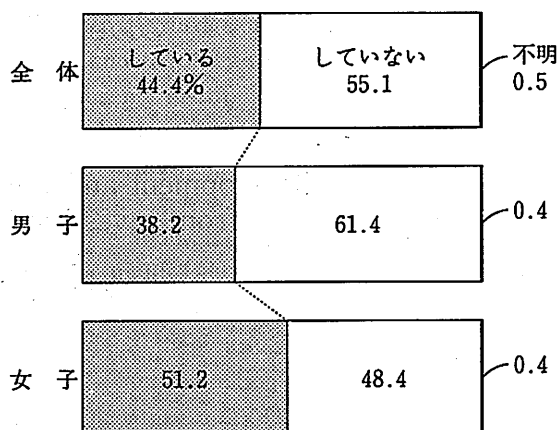
(3) 親の習い事に対する意識をみると、次のようになる。

㊦ 「お子さんの習い事についてどのようにお考えですか」と質問したところ、「子どもが習いたいものを習わせる」が両親ともに6割をこえ、かなりの人が子どもの希望を第一に考えていることがわかる。また、「将来のためになるものを習わせたい」という考えは、父親よりも母親の方が強い(図表1-8)。

㊧ 子どもの性の違いによる、親の習い事に対する意識についてみると、図表1-9のようになる。両親とも、女の子の場合の方が男の子の場合よりも、「将来のためになるものを習わせたい」の割合が高い。これは、女の子の場合、ピアノなど音楽関係の習い事をしている子が多かったこととも関連していると思われる。

㊨ 「習い事は必要ない」という答えは、父親の方が母親を上回っている。ただ、全体として4%しかなかったことは、注目しなければならない。

図表1-1 習い事をしているか



図表1-2 習い事（全体）

順位	名前	人数
1	ピアノ	112
2	水泳	67
3	体操	39
4	ブレイルーム	23
5	音楽教室	18
6	エレクトーン	13
7	習字	11
8	オルガン	10
9	バレエ	7
10	バイオリン	6

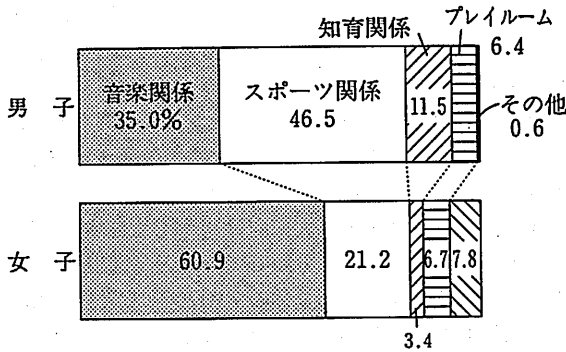
図表1-3 習い事（男子）

順位	名前	人数
1	水泳	44
2	ピアノ	32
3	体操	24
4	ブレイルーム	10
5	音楽教室	9

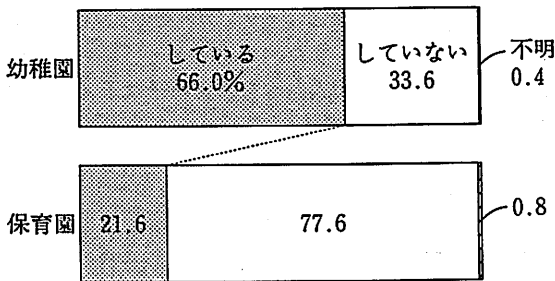
図表1-4 習い事（女子）

順位	名前	人数
1	ピアノ	80
2	水泳	23
3	体操	15
4	プレイルーム	13
5	エレクトーン	12

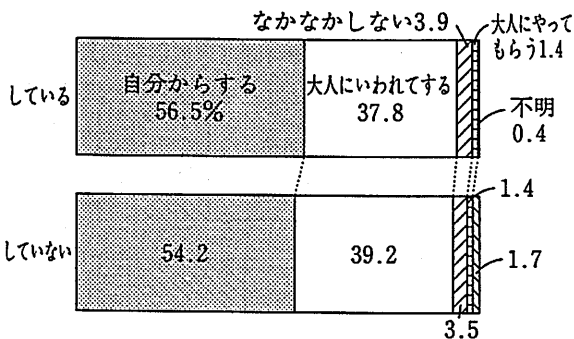
図表1-5 分類別習い事



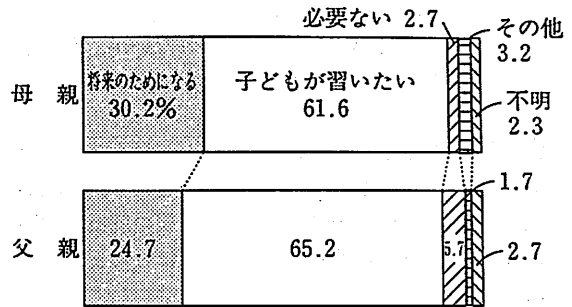
図表1-6 習い事（幼稚園・保育園別）



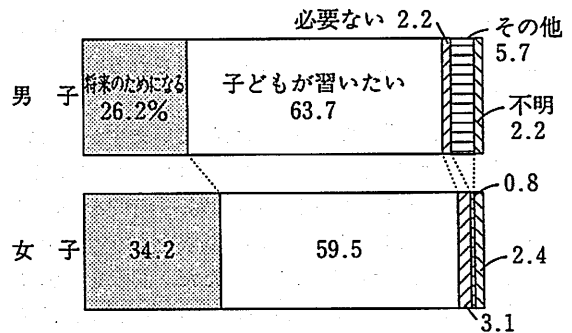
図表1-7 着替え（習い事別）



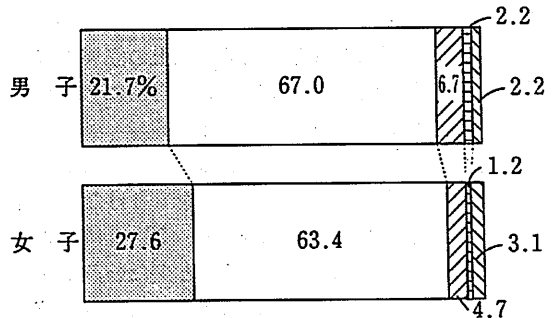
図表1-8 親の習い事についての考え



図表1-9 母親の習い事についての考え（性別）



父親の習い事についての考え（性別）



2. テレビ

(1) 視聴時間

① 子どもが「一日でテレビをみる時間はどのくらいですか」という質問に対する回答は、図表2-1のとおりである。ほぼ半数の49.1%が、「2時間くらい」と答えている。「3時間くらい」と「1時間くらい」がともに2割ちょっとである。「4時間以上」が6.7%、「ほとんどみない」は1.9%と少ない。

② テレビの視聴時間を、他の調査項目とクロスさせて関連をみると、次のようになる。

⑦ 家族形態別にみると、三世代以上の家族の子ど

ものの方が、核家族の子どもよりも、テレビをみている時間が長い(図表2-2)。

④ 性別による違いはあまりみられないが、女の子の方が男の子よりも、少しだけテレビをよくみている。

⑤ 母親の就業形態別では、パートが最もよくテレビをみており、次に、勤め人、自営となり、無職が最も少ない(図表2-3)。また、父親の就業形態別による子どもの視聴時間の違いは、ほとんどみられない。

⑥ 就園別にみると、保育園に行っている子の方が、幼稚園に行っている子よりも、テレビをみている時間がかかなり長い(図表2-4)。これは、母親の就業形態とも関係していると思われるが、園の保育内容とどのように関連しているか、注目される。

(2) 視聴制限

① テレビを「どのようにして試みていますか」という質問に対する答えは、図表2-5のとおりである。「番組を決めてみている」が47.2%、「時間を決めてみている」が13%で、何らかの制限をもうけてテレビをみている子が6割である。ただ、制限を特別にもうけないで「自由にみている」5・6歳児も、38.1%と4割近くいる。

② これを他の調査項目とクロスさせて関連をみると、次のようになる。

③ 家族形態別にみると、三世代以上の家族の方が核家族よりも、制限をもうけないで自由にテレビをみている子がかかなり多い(図表2-6)。

④ 男女別による違いは、ほとんど認められない。

⑤ 母親の就業形態別では、制限をもうけないで自由にテレビをみている子は、パート47%、自営45%、勤め人43%であるが、無職は31%と少ない。これを父親についてみれば、自営45%、勤め人37%となる。母親が無職で父親が勤め人の層が、子どものテレビ視聴に制限をもうけている割合が最も高い。

⑥ 着替えとの関連をみると、制限をもうけないで自由にテレビをみている子は、着替えを「自分からする」の割合が最も低く、「なかなかしない」と「大人にやってもらう」とを加えた割合が最も高い(図表2-7)。前稿で検討したように、幼稚園・保育園から帰ってから夕食まで「テレビをみていることが多い」と答えた子は、制限をもうけないでテレビをみている割合が高く、また、生活習慣などの自立がかかなりおくれていたが、同様なことがいえよう。

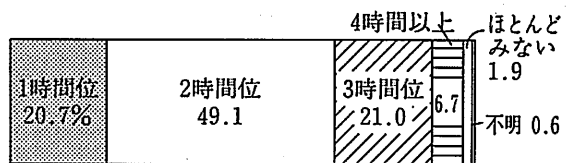
(3) 好きな番組

子どもの好きなテレビ番組(5つ以内)を自由にあげてもらったが、全体の番組ベスト10を示せば、図表2-8のようになる。「ドラエモン」が第1位で、全体の半数以上の子があげており、この年齢の子どもに特に人気のある番組であることがわかる。

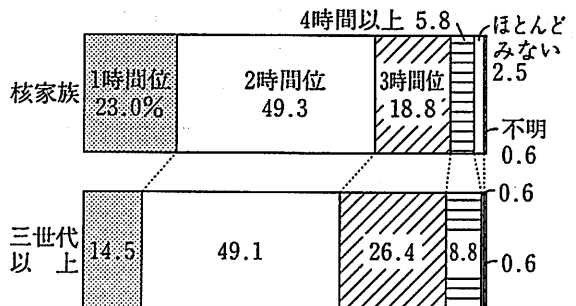
また、男女別のベスト5は、図表2-9、図表2-10のとおりである。「ドラエモン」「ひらけポンキッキ」は男女共に人気があるが、その他の番組では性による違いがはっきりとみられる。男の子の好きな「マスクマン」「聖闘士星矢」「メタルダー」(いずれも戦闘もの)は、女の子はほとんどあげていない。逆に、「メイプルタウン」「エスパー魔美」「愛の若草物語」は、女の子にのみ人気のある番組で、いずれも女の子が主人公のマンガである。

あげられた全体の番組を、①「マンガ(戦闘もの)」、②「マンガ(藤子不二夫)」、③「マンガ(その他)」、④「コミック・バラエティー(子ども向け)」、⑤「コミック・バラエティー(大人向け)」、⑥「自然や動物もの」、⑦「その他」、に分類してみると、図表2-11のようになる。マンガが全体の7割と多いが、男女によって好きなものがかなり異なることもよくわかる。男の子は「マンガ(戦闘もの)」が27%で第1位であるが、女の子は9%と少ない。かわりに、女の子では、家庭ものや文芸ものなどの「マンガ(その他)」が30%と多く第1位である。また、コミック・バラエティーも、男の子は比較的大人向けを、女の子は子ども向けを好む傾向にある。

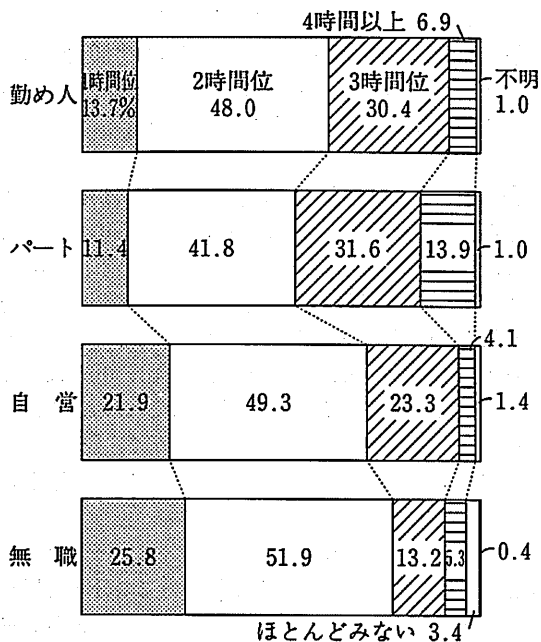
図表2-1 1日でテレビをみる時間



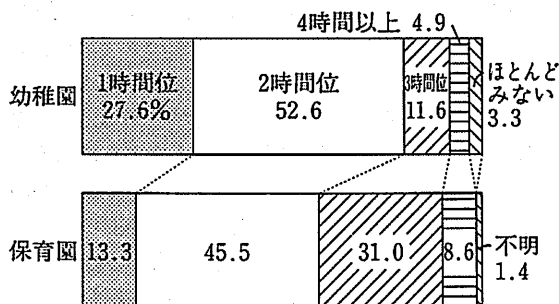
図表2-2 テレビ視聴時間(家族形態別)



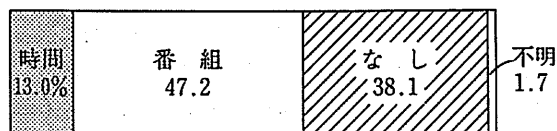
図表2-3 テレビ視聴時間（母親就業形態別）



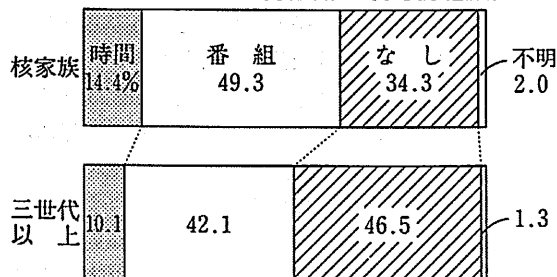
図表2-4 テレビ視聴時間（就園別）



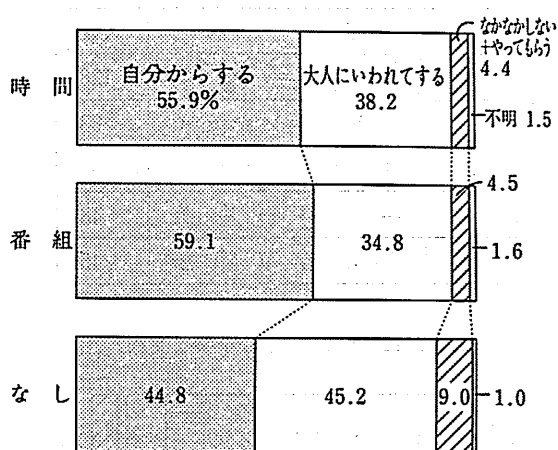
図表2-5 テレビの視聴制限



図表2-6 テレビの視聴制限（家族形態別）



図表2-7 着替え自立度（テレビ視聴制限）



図表2-8 好きな番組（全体）

順位	名前	人数
1	ドラエモン	279
2	ひらけポンキッキ	145
3	マスクマン	98
4	加トちゃんケンちゃん	90
5	忍者ハットリ君	82
6	聖闘士星矢	81
7	ドラゴンボール	81
8	メイプルタウン	63
9	メタルダー	62
10	サザエさん	58

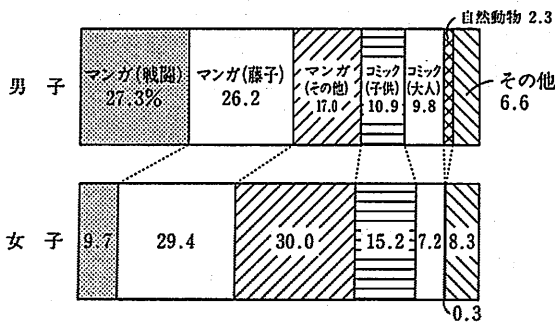
図表2-9 好きな番組（男）

順位	名前	人数
1	ドラエモン	151
2	マスクマン	80
3	聖闘士星矢	76
4	ひらけポンキッキ	62
5	メタルダー	58

図表2-10 好きな番組(女)

順位	名 前	人数
1	ド ラ エ モ ン	128
2	ひらけポンキッキ	83
3	メイプルタウン	57
4	エ ス パ ー 魔 美	48
5	愛 の 若 草 物 語	45

図表2-11 好きな番組分類(性別)



3. 絵本・おはなし

(1) 絵本の読みかせ

① 子どもに「絵本を読んでやりますか」という質問に対する答えは、図表3-1のとおりである。「毎日読んでやる」が18.9%、「時々読んでやる」が60.8%と、かなりの5・6歳児が絵本を読んでもらっている。しかし、あまり読んでもらえなかったり、ほとんど読んでもらえない子も、2割近くいる。

「毎日読んでやる」「時々読んでやる」と答えた人に対して、「主に誰が読んでやりますか」とたずねた結果が、図表3-2である。母親は94.7%と非常に多いが、父親は3割ほどである。また、きょうだい15.4%、祖父母が7.2%である。

② 絵本を読んでやるかどうかを、他の調査項目とクロスさせて関連をみると、次のようになる。

⑦ 核家族、三世代家族など家族形態の違いによる差は、ほとんどみられない。

④ 性別による違いもあまりみられないが、男の子の方が女の子よりも、絵本を読んでもらう割合が少しだけ高い。

② 母親の就業形態別では、無職が最も子どもに絵本を読んでやっている。以下、パート、自営、勤め

人の順になるが、あまり違いはみられない。父親の就業形態別による違いは、ほとんどみられない。

⑤ 「着替え」などの子どもの基本的生活習慣の自立と、絵本を読んでもらっているかどうかとの、はっきりとした関連をみだすことは難しい。

(2) 好きな本

① 子どもの好きな本(5つ以内)を自由にあげてもらったが、予想どおり、いろいろなものがあげられた。これを、①「名作・古典」、②「創作童話」、③「伝記」、④「図鑑等」、⑤「マンガ・雑誌」、⑥「その他1」(名作・古典が主でマンガが従)、⑦「その他2」(マンガが主で名作・古典が従)、⑧「なし」の8種類に分類してみると、図表3-3のようになる。全体では、「名作・古典」が少なく、「マンガ・雑誌」が多いのが目立つ。好きな本がない子も、19.1%と2割近くいる。

5・6歳児になると、男女によって、好きな本の違いもかなりはっきりとみられる。先の分類を男女別にみると、女の子は「その他1」(名作・古典が主でマンガが従)が第1位であり、「創作童話」や「名作・古典」も比較的多い。これに対して、男の子は、「マンガ・雑誌」が第1位で、好きな本「なし」が第2位である。

② 絵本をよく読んでやるかどうかと、幼児の好きな本との関連をみると、図表3-4のようになる。絵本を読んでもらう子ほど「創作童話」の割合が高くなり、逆に、「マンガ・雑誌」「図鑑等」の割合は低くなる。また、絵本をよく読んでもらう子ほど、好きな本「なし」の割合は低い。幼児の読書傾向は、大人が絵本を読んでやるかどうかと密接に関連していることがわかる。

③ 両親に、子どもの頃「よく読んだ本又は心に残っている本」を自由に3冊まであげてもらったが、これも実にさまざまなものがあげられた。性による違いがここでもかなり認められ、母親は「名作・古典」が多いのに対し、父親は「なし」が5割をこえている(図表3-5)。

両親に対する質問は子どもの頃という漠然としたものであるため、単純な比較はできないが、これを現在の5・6歳児の好きな本の分類(図表3-3)と比べてみると、読書傾向の違いがかなり明瞭になる。総じて、「名作・古典」が減り、「マンガ・雑誌」や「創作童話」が増えている。

また、母親の読書傾向と子どもの読書傾向との関連をみると、母親が子どもの頃よく読んだ本・心に

残っている本と子どもがあげた好きな本との関連がきわめて高い。8つの分類中、「名作・古典」「創作童話」「伝記」「マンガ・雑誌」「なし」の実に5つで最も高い相関が認められる。これに対して、父親と子どもとの関連はほとんど認められない。これは、子どもに本を読んでやることが、父親よりも母親の方が圧倒的に多いことによると思われる。

親が豊かな本の世界をもち、それを子どもに読み伝えていくことが、子どもの中に豊かな世界をつくりだし、子どもの心を育てていくことにつながるのである。

(3) おはなし

① 子どもに「昔話や物語など『おはなし』を話してやりますか」という質問に対する回答は、図表3-6のとおりである。「毎日話してやる」は1.9%、「時々話してやる」も37.3%しかなく、絵本と比べて、幼児に「おはなし」をしてやる人はかなり少ない。

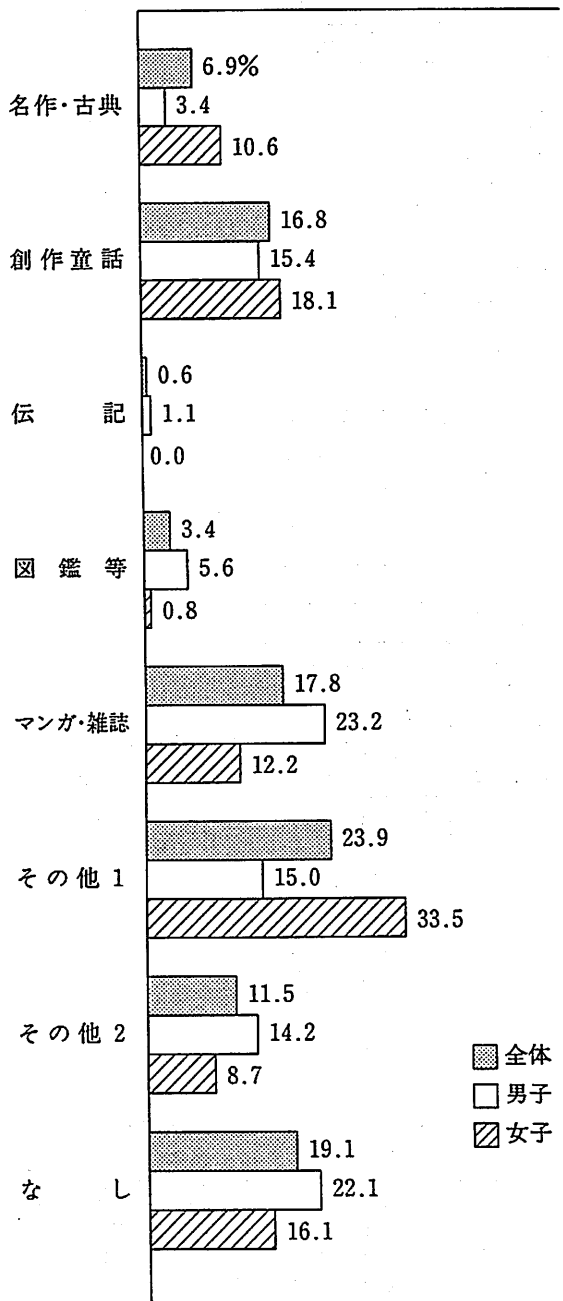
「毎日話してやる」「時々話してやる」と答えた人に対して、「主に誰が話してやりますか」とたずねた結果が、図表3-7である。母親、父親の割合は、絵本と比べると少し低く、きょうだいに話してもらう子は少ない。かわりに、祖父母が19%と、絵本の場合よりもかなり多くなっている。

② 「おはなし」を話してやるかどうかを、他の調

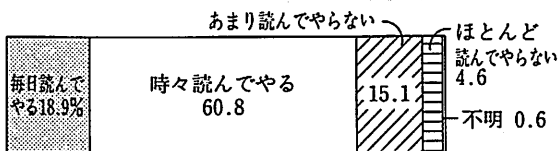
査項目とクロスさせて関連をみると、次のようになる。

⑦ 家族形態別にみると、「毎日話してやる」「時々話してやる」は核家族が37%であるのに対し三世代以上の家族は41%と、三世代以上の家族の方が「おはなし」をしてやる割合が高い。

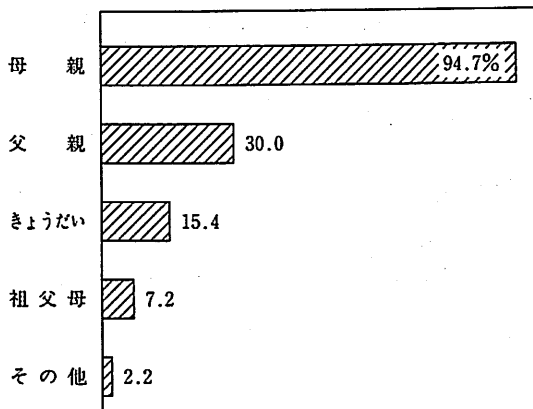
図表3-3 好きな本



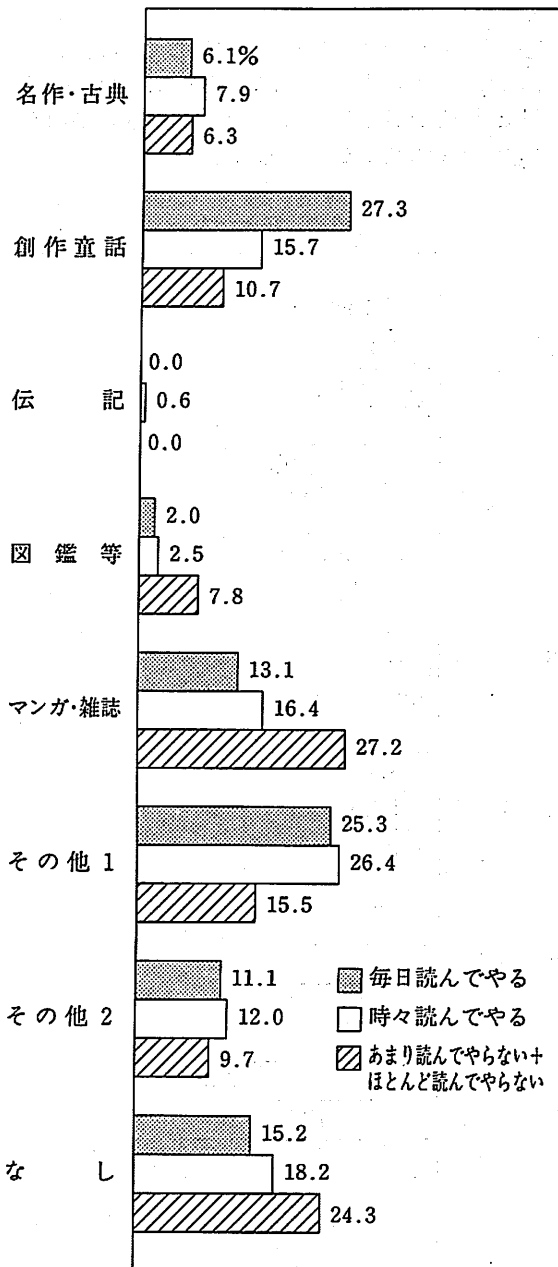
図表3-1 絵本を読んでやるか



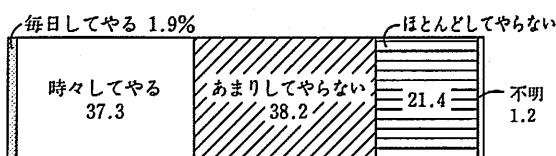
図表3-2 主に誰が読んでやるか



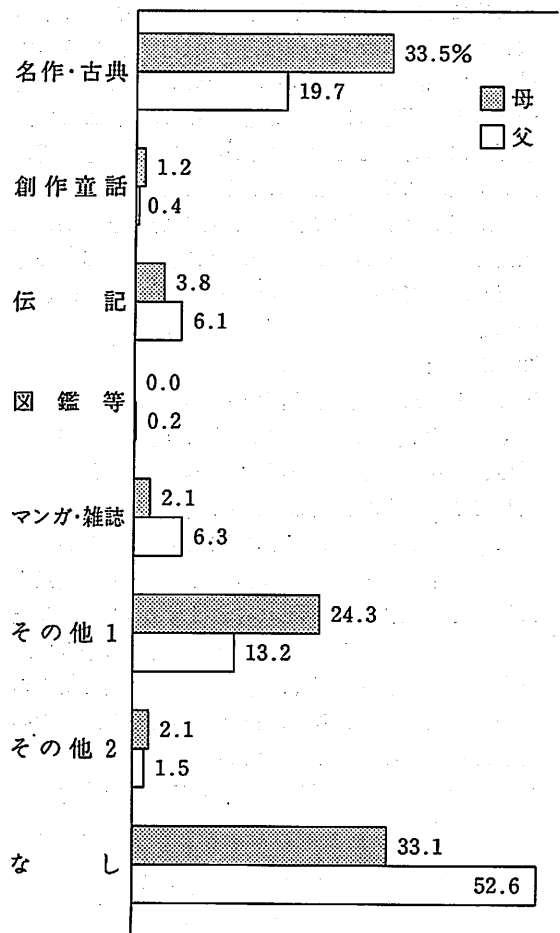
図表3-4 好きな本（絵本の読みきかせ別）



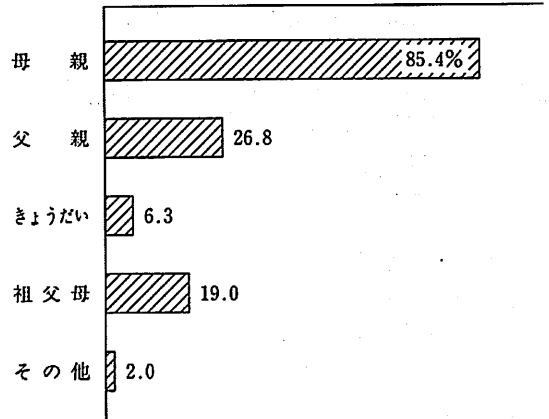
図表3-6 「おはなし」をしてやるか



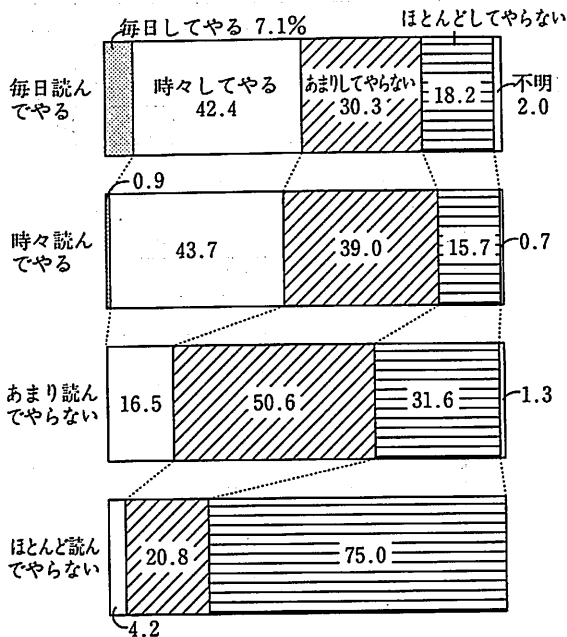
図表3-5 両親の子供の頃よく読んだ本



図表3-7 主に誰が話してやるか



図表3-8 おはなし（絵本の読みきかせ別）



- ① 性別による違いはあまり認められないが、女の子の方が男の子よりも、「おはなし」をしてもらっている割合が少しだけ高い。
- ② 母親の就業形態別による、子どもに「おはなし」をしてやるかどうかの違いは、ほとんどみられない。父親の就業形態別も同様である。
- ③ 子どもに「おはなし」をしてやることと、絵本を読んでやることは、図表3-8のように、はっきりと関連がみられる。すなわち、絵本を読んでやる割合が高いほど、「おはなし」をしてやる割合が高くなっているのである。

4. 生活技能

(1) 日常生活において必要な道具など10項目について、子どもが「一人で使えるものや一人でできるもの」についてたずねた結果は、図表4-1のとおりである。「はさみ」はほとんどの子どもが使用できるが、5・6歳児になっても「ほうき」が使えない子が2割以上、「雑巾しぼり」ができない子が3割以上いる。「ひも結び」は5割以上の子ができず、「栓抜き」ができるのは3人に1人、「かんきり」ができる子は6.9%にすぎない。

これを性別にみると、男女によりかなりの違いが認められる。たとえば、「金づち」が使えるのは男の子は

33.7%であるのに対し、女の子は13.8%にすぎない。逆に「ひも結び」は女の子の57.9%ができるのに、男の子は34.5%しかできない。「雑巾しぼり」も男女差が著しい。

(2) 道具などの使用能力と生活習慣の自立との関連を、「着替え」についてみると、図表4-2のようになる。着替えを「自分からする」子は、道具などの使用能力についての10の調査項目のうち、実に8項目において、「一人で使えるものや一人でできるもの」の割合が最も高い。逆に、着替えを「なかなかしない+大人にやってもらう」子は、10の調査項目のうち8項目で、「一人で使えるものや一人でできるもの」の割合が最も低い。また、着替えを「自分からする」子と、「なかなかしない+大人にやってもらう」子とは、「雑巾しぼり」や「ひも結び」では20ポイント以上の差がみられ、生活技能の他の項目でもかなりの差が認められる。このように道具などの使用能力と着替えの自立度とは、密接に関連していることがわかる。

(3) 道具などの使用能力を「お手伝い」とクロスさせて両者の関連をみると、図表4-3のようになる。お手伝いを「決めてよくしている」子は、道具などの使用能力についての10の調査項目のうち、実に8項目において、「一人で使えるものや一人でできるもの」の割合が最も高い。また、他の2項目でも第1位とほとんどかわらず、生活技能において優れていることがわかる。逆に、お手伝いを「ほとんどしない」子は、道具などの使用能力についての10の調査項目のうち8項目において、「一人で使えるものや一人でできるもの」の割合が最も低く、その差も大きいものが多い。

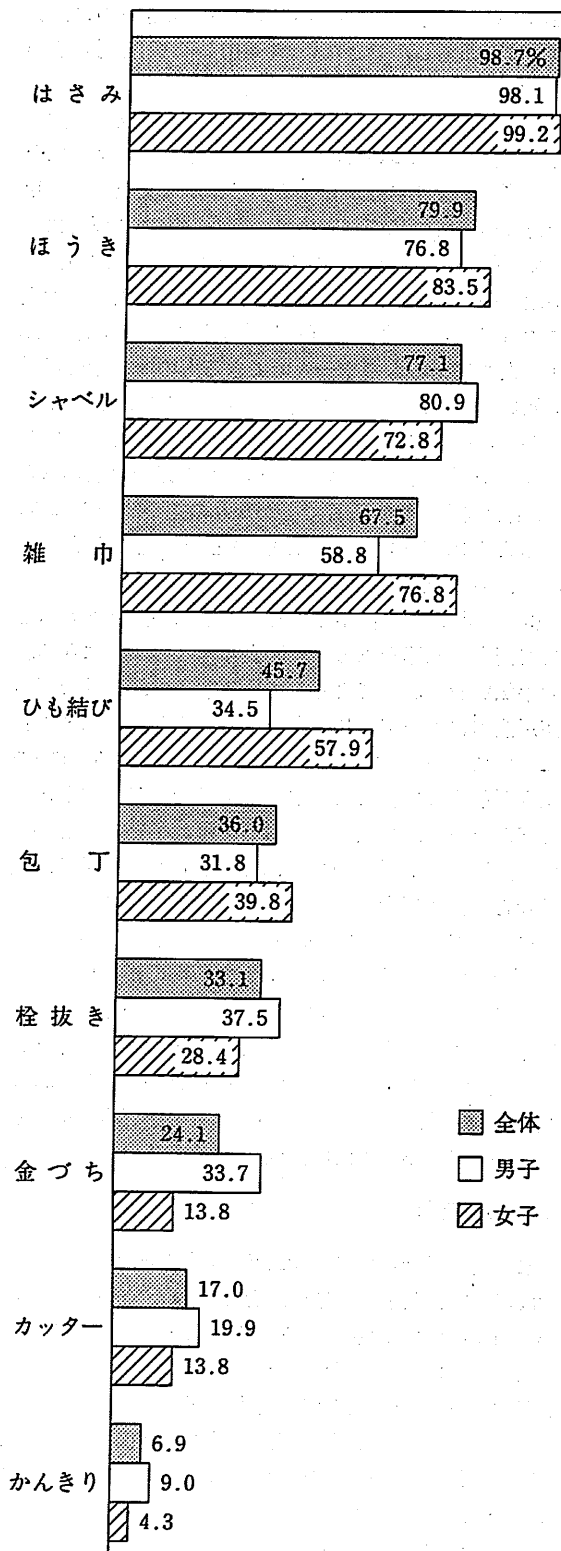
このように生活技能の習熟度とお手伝いとは密接に関連しており、お手伝いをよくする子ほど、日常生活に必要な道具などの使用能力が高いという結果は、「手足が虫歯になっている」という今日の子どもの問題を考えるうえで大きな示唆を与えてくれる。

5. 参加活動

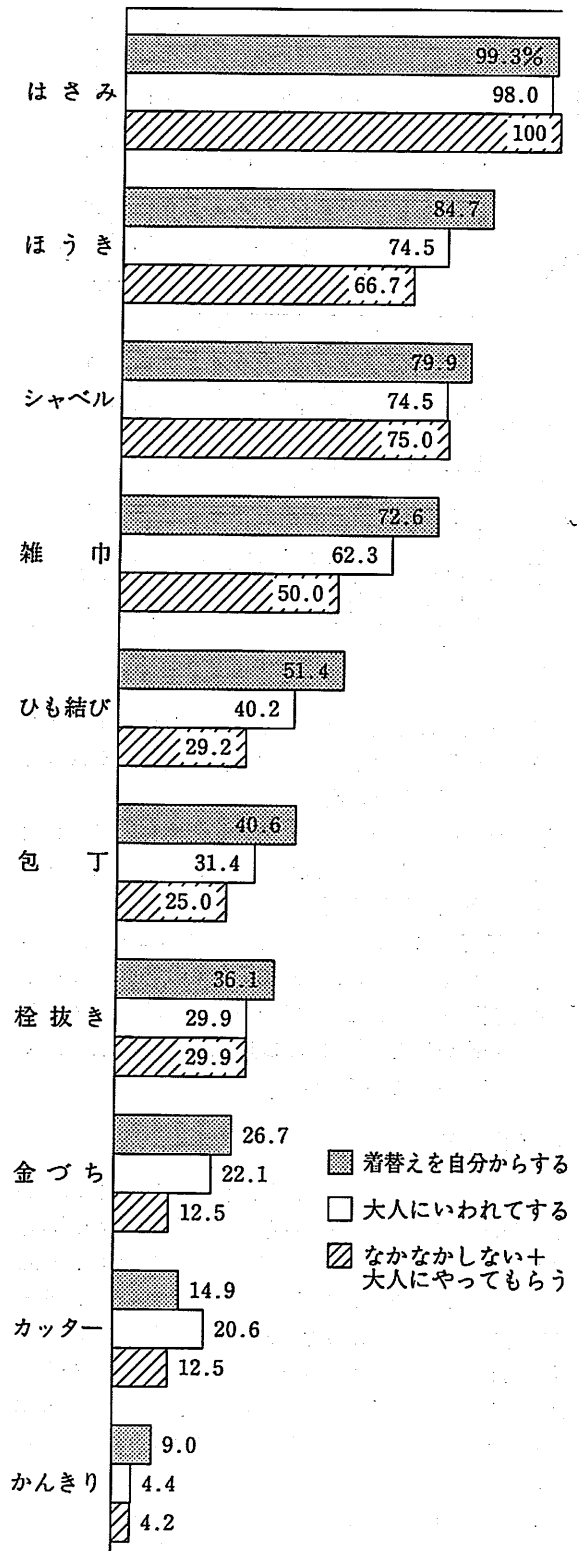
(1) 子どもが地域社会における活動や行事などに参加したことがあるかどうかをたずねた結果は、図表5-1の示すとおりである。祭りは6割以上の5・6歳児が参加した経験をもつが、ほかは、いずれも5割以下である。そのなかで、町内子ども会の44.9%、親子劇場の35.6%が目立つが、公民館や図書館の活動は16.6%にすぎない。また、地域の活動や行事などに参加したことがない子も、15.3%いる。

(2) 両親が子どもの頃、地域の活動や行事などに参

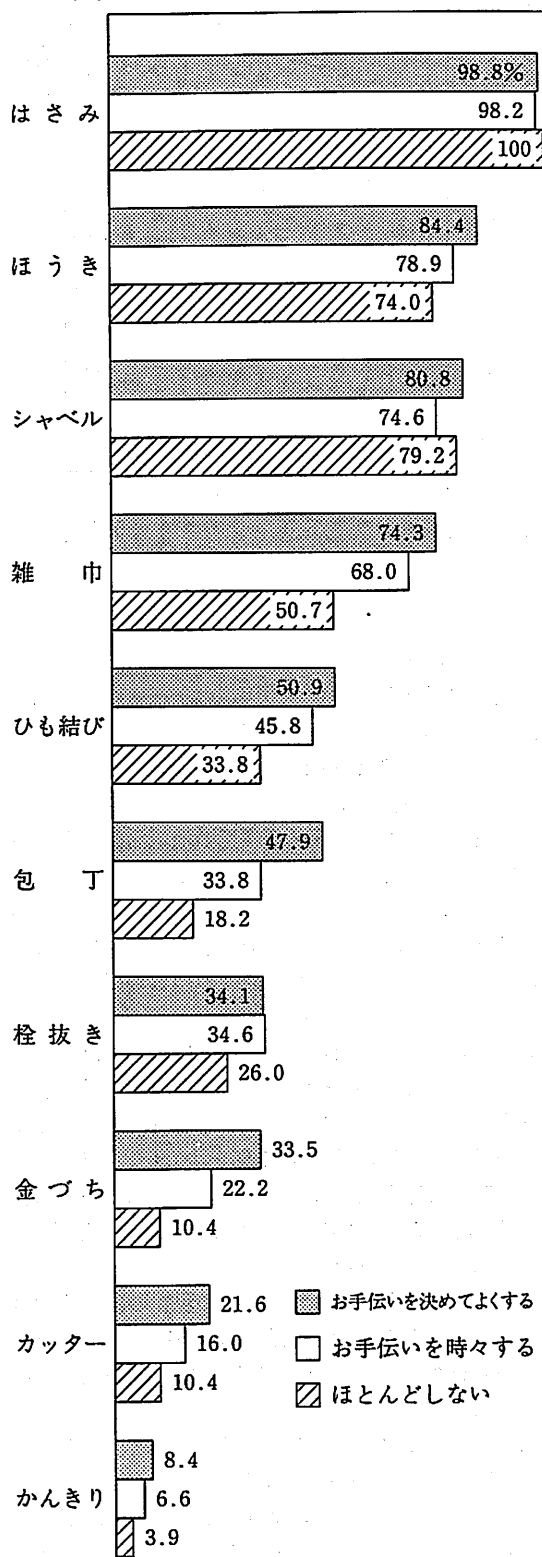
図表4-1 一人で使えるもの



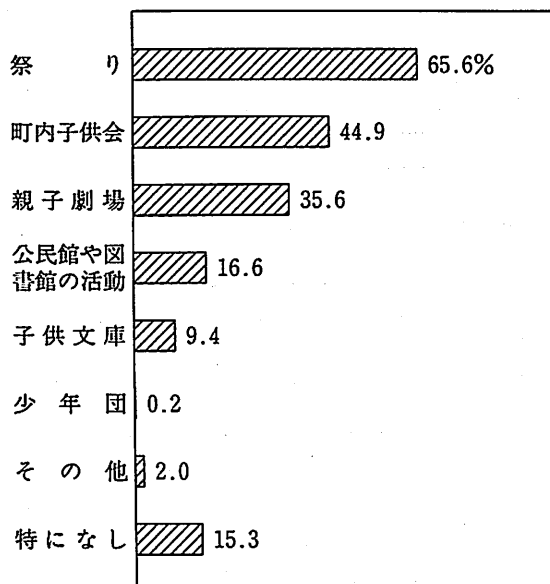
図表4-2 一人で使えるもの（着替え自立度別）



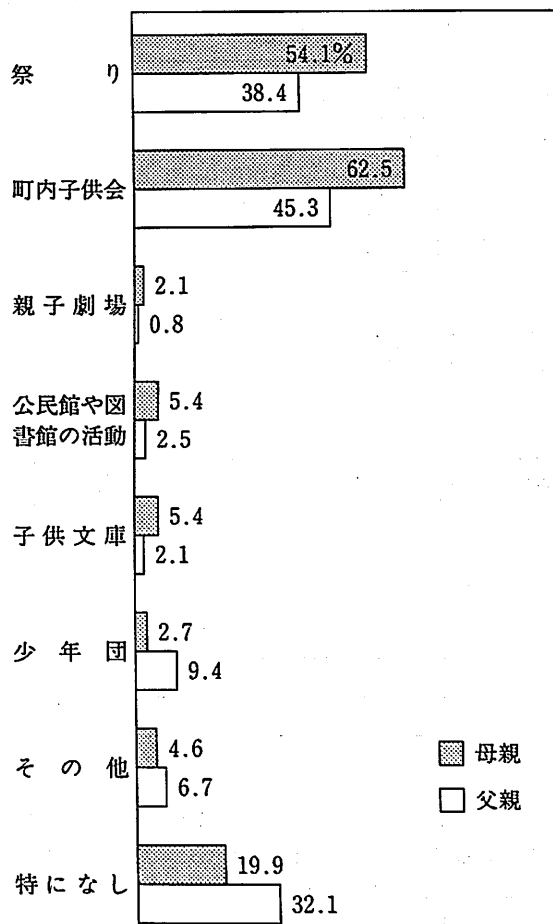
図表4-3 一人で使えるもの（お手伝い）



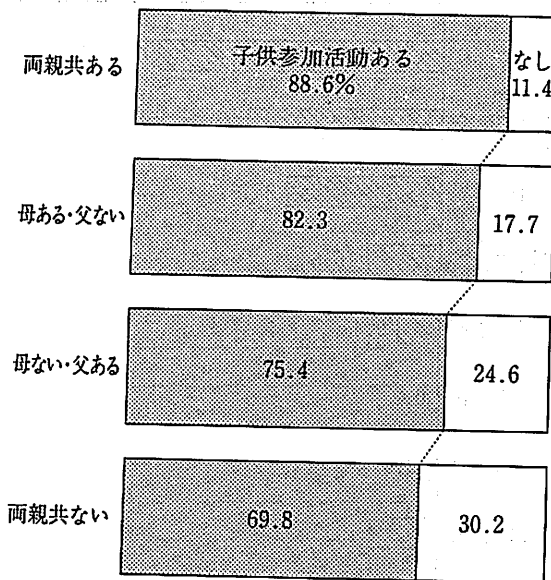
図表5-1 子どもが参加したことのある活動



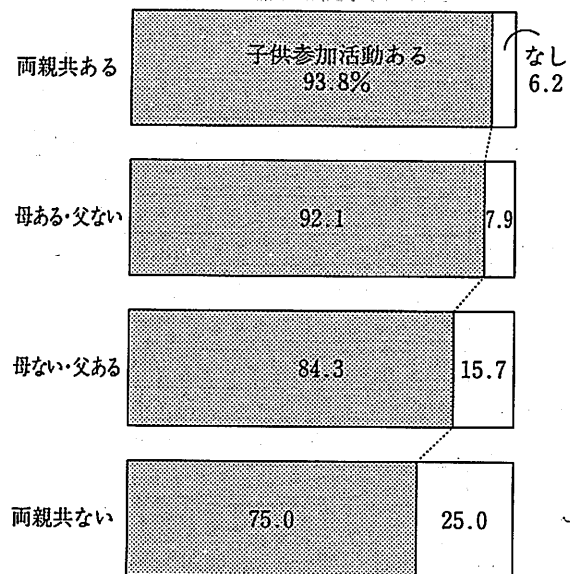
図表5-2 両親が子どもの頃参加していた活動



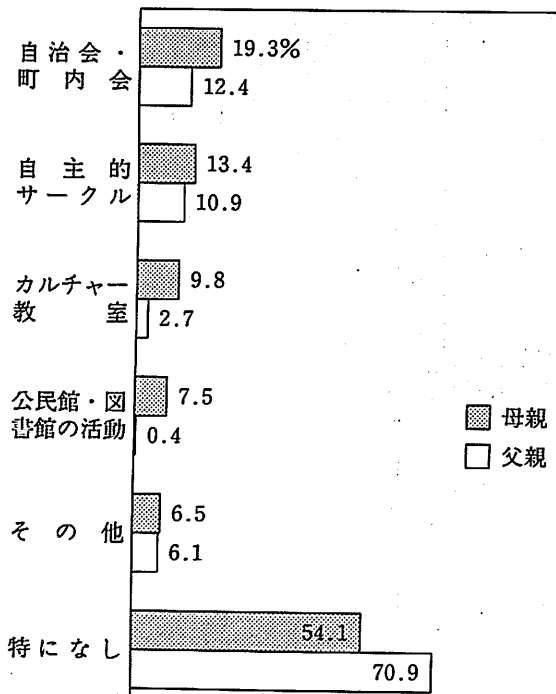
図表5-3 子供の参加活動(親が子供の頃の参加活動別)



図表5-5 子供の参加活動(親の現在の参加活動別)



図表5-4 両親の現在参加している活動



加していたかどうかをたずねた結果が、図表5-2である。概して、現在の子どもよりも地域の活動や行事などに参加した割合は低いが、町内子ども会が活発であったこともわかる。また、母親の方が父親よりも、

地域の活動などに参加していた割合が高い。

母親と父親とを合わせて、両親の子どもの頃の地域の活動などへの参加状況を見ると、「両親共にある」52%、「母ある・父ない」24%、「母ない・父ある」10%、「両親共にない」12%となる。

これを、先ほどみた5・6歳児の地域活動などへの参加経験の有無とクロスさせてみると、図表5-3のようになり、両者の関連がはっきりと認められる。両親が子どもの頃、地域の活動や行事などに参加したことがあるほど、子どもの参加経験の割合が高いのである。

(3) 両親に現在参加している活動についてたずねた結果は、図表5-4のとおりである。母親は、「自治会・町内会」が19%、「自主的サークル」が13%であるが、「公民館や図書館の活動」は7%と少ない。また、「なし」が54%と過半数をこえている。父親についてみれば、「なし」が7割になる。参加している活動の順位は、母親とあまり変わらない。

母親と父親とを合わせて、両親の現在の参加活動の有無についてみると、「両親共にある」15%、「母ある・父ない」26%、「母ない・父ある」9%、「両親共にない」48%となる。

両親が現在参加している活動があるかどうかと、子どもの地域活動などへの参加経験の有無との関連についてみると、図表5-5のようになる。両親が現在地域の活動などに参加していることが多いほど、子ども

の参加経験の割合も高くなり、両者は密接に関連しているのである。

このように子どもが地域の活動や行事などに参加したことがあるかどうかは、両親が子どもの頃そうした活動や行事に参加していたかどうかと、また、現在参加しているかどうかと深く関係していることがわかる。

IV 結 び

これまで調査結果をもとに、新潟市の5・6歳児の生活や発達について、習い事、テレビ、絵本、生活技能、参加活動などの問題に焦点をあててみてきた。そのなかで明らかになった主な点を整理し、結びとした。

第一に、習い事をしている子が新潟市では5割近くおり、特に、幼稚園に行っている子の3人に2人は、習い事をしていた。習い事に対する親の意識をみると、子どもの希望を第一に考えて習い事をさせていることが知れたが、「習い事は必要ない」という答えは、全体の4%しかなかった。習い事をするのが幼児の発達にどのような意味をもつかについて、あらためて検討する必要がある。

第二に、5・6歳児が一日にテレビをみる時間は、平均2時間くらいであった。また、番組を決めるなど制限を特別にもうけないで、自由にテレビをみている子が4割近くいたが、そうした子は、着替えなどの自立がおくれていた。好きなテレビ番組は全体としてマンガが多かったが、5・6歳児になると男女によってかなりの違いがあることもわかった。

第三に、好きな本がなかったり、「マンガ・雑誌」と答えた子が多く、現在の幼児の本の世界はかなり貧し

くなっていることがわかった。同時に、絵本をよく読んでもらう子ほど豊かな本の世界をもち、幼児の読書傾向は、大人が本を読んでやるかどうかと密接に関連していた。また、母親が子どもの頃よく読んだ本と、幼児が現在好んで読んでいる本との間にも、きわめて高い相関があることが明らかになった。

第四に、5・6歳児になっても「ひも結び」ができない子が5割以上、「雑巾しぼり」ができない子が3割以上いるなど、日常生活において必要な道具などの使用能力がかなり劣っていることが明らかになった。また、生活技能の習熟度とお手伝いとは密接に関連しており、お手伝いをよくする子ほど、日常生活に必要な道具などの使用能力が高いことがわかった。

第五に、地域における活動や行事に参加したことのある子どもは、祭りをのぞくといずれも5割以下で、かなり少ないことがわかった。同時に、子どもの参加経験は、親が子どもの頃地域の活動などに参加していたかどうかと、また、現在参加しているかどうかと、密接に関連していることが知れた。

以上、調査結果をもとに明らかになった点を簡単にまとめてみたが、調査を通じて、幼児の成長や発達において家族などまわりの大人の与える影響の大きさを、あらためて知ることができた。可塑性のきわめて大きい幼児期は、環境やまわりの人々の働きかけによって、発達に大きな相違が生じるのである。また、この時期に形成されたものは、生涯を通じて大きな意味をもつ。子どもの発達をめぐるさまざまな問題が生じている現在、幼児と幼児をとりまく状況を今一度見つめ直していく必要がある。

(本研究において大変お世話になった間藤侑、小林正子、椎谷淳、天児淑子の各氏と調査に協力してくださった皆さんにあらためてお礼申し上げます。)